

コチャバネセセリは、信州や北海道で6-7月にチョウ目的で山道を歩けば、いやでも野生ケモノの獣糞に群れをなして集まっている光景を目にする地味な小型のセセリチョウで、果たして初めて出会ったのがいつだったのか、また、その場所は？と想いだそうとしても、確実な記憶はないし、とりたててきれいなチョウではないため積極的にネットインを計る対象種ではない。筆者が初めて記録しているのは、



北海道愛山溪でヤマキマダラヒカゲとともに獣糞にたかって吸汁していた情景である。日付は1996年6月25日、チョウ採集を主目的として初めて北海道旭川を基点として自転車を借りて走りまわったときのことだ。

この小型のチョウは、信州の溪流沿いに遊歩道などを散策すると、路面の湿った場所で静かにストローを伸ばしている姿に出会うことが多い。驚かせば、ハエの動きにも似たすばやい飛翔で場所を変え、再び路面で吸水を始めたりする。加古川周辺では一箇所で大量の個体が発生しているということがないせいで、北海道などで目にする大群で獣糞にたかっているような光景に出会うことはめったになく、多くはただの1頭だけが路面でひっそりとストローを伸ばしていたり、あるいは路傍の草葉や小石上



でジェット機のような形にはねを広げて、日光浴を楽しんでいたりする姿をみる。権現湖の周回道路を自転車で走っていると、まさに黒いハエが飛んでいるかのような動きをみせ、おもむろにアスファルト路面にはねを広げて静止した時点で、初めてコチャバネセセリだと確認できる。

日本での分布は北海道から九州まで。加古川周辺では、4月中旬から6月上旬までと7月下旬から9月下旬までの年2回の発生を認める。幼虫はササ類の葉の表面を内側にして巻いた巣をつくって、その中に身を潜めながら中脈を残すように葉っぱの基部から先端にむかって食ってゆく。その結果、主脈に筒状の巣がぶらさがることとなり、幼虫の発見は比較的容易な種である。